

## 福光石の魅力

片山直樹

福光石とは、大田市温泉津町福光周辺で、古くは室町時代から採石された石材としての名称である。地質名称としては「安山岩質火山礫凝灰岩」であり、今から1500～1600万年前（新第三期中期中新世）に海底に降り積もった火山灰が固結してできた地層（地質名は久利層）である。

今回、「石東地域の地形・地質に関する地域貢献研究分科会」に参加し、改めて福光石の魅力について知ることができたので、その内容を含め、福光石の特徴について以下に述べる。また、石見地方の文化を伝える観光資源としての価値、石材としての可能性についても私見を述べたい。

### 1. 福光石の特徴

福光石の特徴をまとめると以下のようなものである。

- ① 淡い青緑色で光の反射率が低いため、落ち着いた風合い
- ② 比較的軟らかい岩質であるため、採掘や加工が行いやすい
- ③ 物理的性質が等方均質であり、安定した強度がある
- ④ 微小な空隙が内在する多孔質素材ため、断熱性や吸音性に優れる
- ⑤ 適度な吸水性があるため、土壁や木材と同様に、湿度調整機能を有する
- ⑥ 水に濡れても滑りにくい（温泉の床面への使用例あり）
- ⑦ 遠赤外線効果や、優れた吸湿性・吸臭性をもつ

これらの特徴により、福光石は石材として古くから高い価値を見出されている。とくに、上記②と③の特徴として挙げたように“採掘や加工がしやすく”それでいて“安定した強度を持つ”部分が、人力に頼らざるを得ない時代に合った資材として重宝されたものと思う。このことは、県内の石材でも全国的に知られている「来待石」にも当てはまる。



福光石の表面の風合い

一方、採掘・加工が機械化された現代では、上記①の視覚的・感覚的な価値の再認識や、④～⑦のような断熱性、吸湿性、吸臭性などの機能性の面で新たな価値が見出されている。

### 2. 福光石の可能性

福光石は、これまで石像・石仏や狛犬、石灯籠、墓石などとして寺社仏閣のシンボリックなアイテムに利用されただけでなく、石臼や流し台、石畳、石橋などの普段の生活に欠かせない材料として利用されてきた。

しかし、文化が進み、コンクリートや鋼材などの利用しやすい“人工的な材料”の出現によって、福光石を含む石材を利用する必然性が低下し、徐々に世代交代が行われていった。

ただし、これらの人工的な材料がとって替わることができない部分においては、い

まだ福光石の活躍の場が残されている。例えば、上記したように福光石の“風合い”を重視した利用を考えた「庭石」などは好例である。あるいは、建築物の内外壁や床材においても、その風合いをデザインの一部分として用いたい場合は、他の素材に換え難い大きなアドバンテージをもつといえる。したがって、福光石がもつ“素朴な風合”のような、つまりは“人の感覚に訴える部分”というのは、非常に大きなセールスポイントとなろう。

福光石の組成に起因した様々な機能性についても、今後さらに注目を浴びてもおかしくないと思われる。すでに、“水に濡れても滑りにくい”部分については、玉造温泉「佳翠苑皆美」や「長楽園」をはじめとする温泉の床材として利用され好評を得ている。

また、福光石が多孔質であることに起因した“断熱性”においても様々な可能性を秘めていると思う。例えば、住宅壁材として利用することで外気温にあまり左右されない室内環境を手に入れることができ、温度調整のためのエネルギーを多く必要としないエコな住宅とすることもできよう。

おまけに湿度調整機能や吸音性、吸臭性などの機能も有していることから、建築用資材として高い付加価値をもっていると考えられ、その方面でのさらなる利用が今後あるのではないかとと思われる。

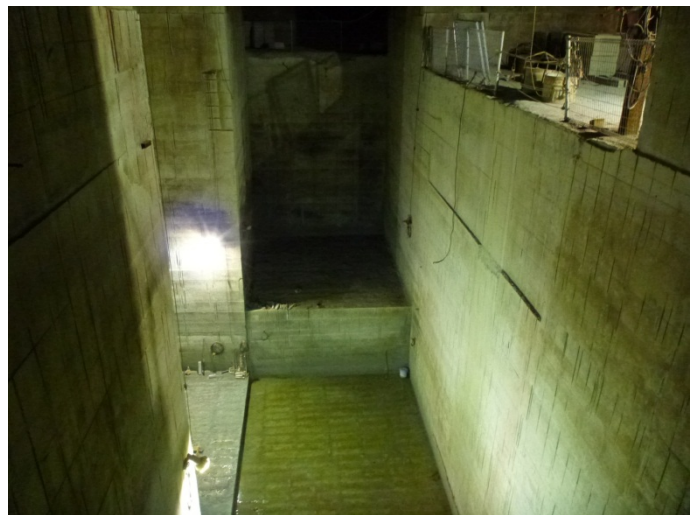
昨今では、農産物のブランド化がどんなものにも行われているような印象を受けるが、福光石はこのブランド化を推進する価値があるのではないだろうか。

### 3. 観光資源としての可能性

福光石の石切り場（大田市温泉津町福波「坪内石材」※要予約）の見学が昨年からは開始されている。

私は今回初めて石切り場の内部に入ったが、まるでコンクリートで作った地下構造物のようで非常に驚いた。このような驚きが、おそらく訪れる人には沸き起こるものと思われ、比較的簡単に非日常を味わえる良い観光スポットになるのではないかとと思う。

なお、夏季の高湿な時期においては石切り場坑内では結露が非常に多く、電気カッターなどを用いる切削作業が行えず、石切り場は休工となっているとのことであった。このため、この休工期に観光者を受け入れることで、地域を興すための新しい役割を担えるのではないかととも思う。



福光石の石切り場内部は  
まるでコンクリート構造物のよう

以上